

## 日本経済史に親しむための「学習用参考文献」

本書『日本経済史 1600-2000』は、近世から現代までの日本経済史の歩みを、近年の研究成果と統計データによってまとめた初学者向けのテキストです。1冊の中に400年間の変化を収める都合上、叙述はどうしても駆け足にならざるを得ませんでした。もちろん、巻末には詳しい引用・参考文献が掲げてありますので、読者は立ち止まりそれらをたよりにして、より詳細な研究内容にふれることも可能です。一方、より大づかみに各時代の動きや雰囲気といったものを理解するには、引用・参考文献のリストでは不十分かもしれません。ここでは、皆さんが日本経済史の面白さに親しんでもらうため、学習にあたって参考になる手ごろな文献をあげてみたいと思います。

### 1 近世の成立と全国市場の展開

この教科書の記述は1600年あたりから始まりますが、これは日本経済史のなかでも特筆すべき大きな変化の時期だということ、また、マクロレベルの数値をさかのぼれる、もっとも古い時期であるという2つの理由にもとづくものでした。しかし、だからといって1600年以前の日本経済史は学ぶ必要がないということではありません。古代・中世の経済に関しては、まだまだわからないことが多いのですが、近年の地方史研究のめざましい展開、あるいは考古学的研究の成果などによって新しい発見が相次いでいることも事実です。

そこで、1600年ころまでの日本史を一挙に読むことができる本として、**網野善彦『日本の歴史をよみなおす』**（ちくま学芸文庫）をあげたいと思います。本書は、縄文時代以降の日本史を、そこに生きた人びとに焦点をあてながら、わかりやすくまとめたものです。これまでの研究では水田で米を作る「百姓」が主人公であると考えられてきましたが、網野氏は畑作や雑穀の生産にも注目し、中世の人びとが多様な生業に従事していたことを明らかにしました。また、農民にくわえ、これまであまり焦点の当たらなかった職人、芸能民、あるいは女性の役割といったことにも光があたっています。

さて近世（第2章の範囲も含みます）についても、この時代の人びとに焦点をあてた本をとりあげましょう。まず、武士に関しては、**神坂次郎『元禄御畳奉行の日記』**（中公文庫）および、**磯田道史『武士の家計簿』**（新潮新書）の2冊を勧めたいと思います。前者は尾張藩の一奉行の日記、後者は加賀藩の「御算用家」の出納帳という史料をもとにした著作ですが、これらの史料はありのままの武士の生活を記録した稀有の存在であることが明らかになります。尾張藩の御畳奉行朝日文左衛門は無類の筆まめで、身の出来事をそれこそ何でも記録しました。月に3日しか出勤しなかったといった意外な生活ぶりを知ると、武士に対するイメージが一新されるのではないのでしょうか。また、金沢藩の経理業務にたずさわる「御算用家」猪山家の出納帳からは、武士の家計の実態がうかびあがってきます。なぜ、武士は一般に貧乏な暮らしをしていたのか。その答えはどうか、武士特有の消費習慣（たとえば大量の贈答品）の中に見出せるようです。

庶民（農工商）の暮らしはどうだったのでしょうか。近年、歴史人口学という学問により、当時の人のライフコースが明らかになってきました。歴史人口学は、江戸時代、全国の町村で毎年作成された「宗門改帳」に記載された個人情報データベース化することにより、出生、死亡、結婚、移動といった人口行動を統計的に明らかにするものです。**鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』**（講談社学術文庫）は、こうした歴史人口学の成果をわかりやすくまとめています。人口規模、平均寿命といった数値を見ると、これまで変化の少ない時代と思われていた江戸時代が実は大きな変動期だったこと、気候変動、流行病なども人口変動に大きな意味を持っていたことなどが理解できるでしょう。

また、**島崎藤村『夜明け前』**（岩波文庫）は主人公青山半蔵という人物の生き方を通して明治維新の意味を問う、日本を代表する文学のひとつです。昭和に入って書かれた小説ではありますが、主人公は藤村の父親をモデルにしていること、また藤村自身、故郷の信州馬籠宿に残る古文書を丹念に読んでいることから宿場町に生きた人びとがかなり忠実に描かれおり、幕末維新期のイメージを描く上でも役にたつでしょう。同じく小説ですが、**佐藤雅美『大君の通貨～幕末円ドル戦争～』**（文春文庫）も勧めたいと思います。本書は、幕末の開港によって一挙に国際マーケットと対面した日本が大量の通貨流出によ

り経済的混乱に巻き込まれていく様子を描いたものです。開港といえば貿易だけをイメージすることが多いのですが、通貨戦争こそ、幕府瓦解のもうひとつの要因だったということを知ると、明治維新に対するイメージが変わるかもしれません。

(浜野 潔)

## 2 田沼時代から松方財政まで

このテキストの第2章では、江戸時代後期から松方デフレ期までをつなげて記述しています。江戸から明治へと時代が変わったことで、変わった側面と変わらなかった側面とがあります。政治体制や制度、公文書の形式などは前者に属し、人々の生産との関わりや生活、私文書の形式などは後者に属するでしょう。かつては近世史、近代史と、それぞれの時代の枠内で研究されがちでしたが、近年では時代の枠を取り払って考察しようとする研究が増えてきています。

ところで、かつての江戸時代と言えば、搾取と貧困、鎖国によるキリシタン弾圧と閉鎖的なイメージなど、いわば負の側面が強調されていましたが、近年では江戸時代の民衆の生き生きとした生活や有効なりサイクルシステムなど、正の側面が強調されるようになってきています。石川英輔『大江戸生活事情』（講談社文庫）には、物価、年貢、自治組織、食生活、上下水道、旅行、教育、芸能など主に江戸の人々の生活に関するトピックが多岐にわたってわかりやすいことばで書かれており、楽しみながら読むことができます。初版が1997年とやや古く、社会主義国を引き合いに出しつつ記述しているところなどは時代を感じさせますが、多くの興味深い事例やデータが記されています。石川氏には他に『大江戸リサイクル事情』『大江戸えねるぎー事情』（いずれも講談社文庫）など江戸時代に関する著作が多数あり、内容的に相互に重複する部分はありますが、併せて読むと、江戸時代をより多面的に学習することができるでしょう。

S・B・ハンレー『江戸時代の遺産—庶民の生活文化—』（中公叢書）は江戸に限らず農村の生活の事例も衣食住にわたって豊富に紹介しています。議論がやや大ざっぱなきらいはありますが、これを読むと、衣食住にわたる庶民の生活が江戸時代の間に充実していき、江戸時代が従来思われていた以上に経

済成長の大きい時代であったこと、またそれが明治期以降へと継続していったことが知られるでしょう。また、同時代のアメリカやイギリスの庶民生活の事例を対比的に取り上げ、日本の江戸時代の民衆の生活が相対的に上回っていたことを指摘するなど、外国人の著者ならではの視点も見られ、その意味でも興味深く読むことができます。

また、同時代の外国人の記した日本についての記録も数多く残っていますが、その中で**E・S・モース『日本その日その日』（全3巻）**（平凡社東洋文庫）を推薦したいと思います。著者は明治初期に御雇外国人教師として来日し東京大学で教鞭をとり、大森貝塚を発見したことで著名な動物学者・博物学者ですが、在日中に残した極めて詳細な日本人の日常生活に関する記録がこの書となって結実しました。日本人にとって自分たちの日常生活というものは、当たり前前の出来事の連続だけに、わざわざ記録に残さず、したがって日本人の記録から過去の時代の日常生活を知ることは意外と難しいものですが、外国人にとっては日本人の当たり前前の日常がかえって珍しいので、モース以外にも記録に残している人がけっこういます。その意味では、**R・フォーチュン『幕末日本探訪記—江戸と北京—』**（講談社学術文庫）もお勧めできる1冊です。フォーチュンはイギリスの植物採集家で、中国の茶をインドにもたらし、後のインド茶業の盛行の礎を築いたことで知られている人です。この書の特徴は、日本の農業生産や日本人の生活を、同時代の中国と比較しつつ述べていることで、後の研究者にとってたいへん興味深い視点と素材を提供してくれています。

（井奥成彦）

### 3 松方デフレから第1次世界大戦まで

この教科書は、マクロ的な視点から日本経済史を描くことに力点が置かれています。もちろん、そのような叙述形式が現在の日本経済の諸問題を理解するのに重要であるからだと考えたからにはほかなりませんが、歴史を作ってきたのはそこに生きた個々の人間であることもまた確かな事実間違いありません。時代と向き合い、ときに苦悩しつつも道を切り開いていった人間たちの生き様を知ることは「経済史」の理解にもきっと役立つことでしょう。とくに次に掲げる3つの「伝記」は、今読んでも読者を魅了すること間違いありません。

まずお勧めしたいのが、幕末から明治にかけ「一身にして二生を経」た福沢諭吉（1835-1901）の伝記、『福翁自伝』（岩波文庫版、慶應義塾大学出版会版、ほか多数）です。「翁」とは年を取った男性に対する一般的敬称ですから、この伝記は福沢が晩年（といっても60歳そこそこの時期ですが）に口述筆記という形で『時事新報』に連載したものをまとめて一書にしたものです。口語体で書かれていますので、同じ福沢の代表作『文明論之概略』などに比べるとはるかに読みやすいですし、当時の庶民向けに書かれて大ベストセラーになった『学問のススメ』よりもとっつきやすいかもしれません。福沢の若い頃の話が中心なので、少しだけ脚色しているだろう部分もなくはありませんが、とにかく痛快です。この痛快さは、近代合理主義・啓蒙主義がもつ痛快さなのでしょう。近代合理主義というと「理屈」っぽく感じられるかもしれませんが、福沢の場合、俗っぽい「立身出世」を度外視して、とにかく自分の信じる「理性」を信じて疑いません。それが既存の権威や体制に刃向かう「やんちゃ」な行動として発露しているところに、きっと読者の皆さんの共感を得られる理由があるのだと思います。

『高橋是清自伝』（中公文庫）は、昭和恐慌期に「高橋財政」を主導し、不況からの脱出に成功した高橋是清（1854-1936）のこれまた痛快な伝記です。「だるまさん」の愛称で親しまれた高橋是清は、「二・二六事件」で命を奪われてしまいますが、この伝記はその高橋の前半生（日露戦争での外債募集成功まで）を綴ったものです。戊辰戦争で上野の山でドンパチしている最中に泰然としてウェーランドの経済書を講じていた福沢先生に比べると、高橋の前半生はとにかく泥臭く、まさに波瀾万丈といって良いでしょう。渡米した先でだまされて事実上「奴隷」としていくつもの家を転々とし、実地の英語を身につけ、帰国後、教壇に立ったのもつかの間、国家のために身を賭して「特許制度」の導入に邁進したり、そうかと思えば、詐欺に引っかかって財産を失ってしまうなど、まさに手に汗握るストーリーが展開されます。そして、クライマックスは国家の命運をかけたの外債募集……。時代がこういう人物を育てたことは確かでしょうが、どんな逆境にあってもプラス思考で前向きにいく高橋の生き方に共感しない人はいないと思います。

**石橋湛山『湛山回想』**（岩波文庫）は、戦前期『東洋経済新報』の主筆をつとめ、戦後、大蔵大臣などを歴任した後、早稲田大学出身者としてははじめて総理大臣になった石橋湛山（**1884-1973**）の回想録です。残念ながら現在品切れで手に入り難いようですが、困難な時代にあって自分の主義主張を貫き通した日本を代表するリベラリスト（自由主義者）である湛山の存在そのものが、日本人として勇気と誇りを与えてくれます。とくに帝国主義的な領土拡張主義を早くから批判し、独自の「小日本主義」を説いた湛山の主張は、現在の国際関係を考える上でも重要です。同じ湛山の『**湛山評論集**』（岩波文庫）も併せてお勧めします。

（中村宗悦）

[2009.11.xx, ver1.0]